

## 異聞 杉本茂十郎と三橋会所

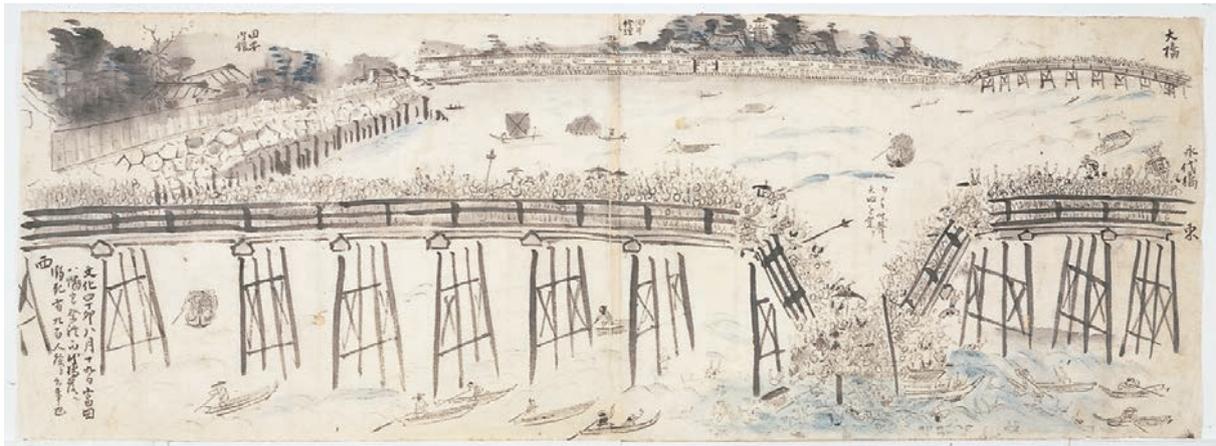
三橋会所頭取に推薦された杉村茂十郎について、『大江戸二百六十年』（川崎房五郎 著 桃源社刊 昭和五十二年）にある「杉本茂十郎と三橋会所」というところに、紹介されているので以下に簡単に要約する。本誌の理解に少し役立つのではないだろうか。

ただ残念ながら紹介に擁した書籍は、出版社が廃業となっているようで古本でしか手に入らない。

杉村茂十郎は甲州の八代郡夏目原村の農民小左衛門のせがれとされている。日本橋万町（現中央区）の定飛脚問屋大阪屋茂兵衛の養子となってその家業を継ぐ。茂十郎は商売柄問屋の内情をよく知っていたという。

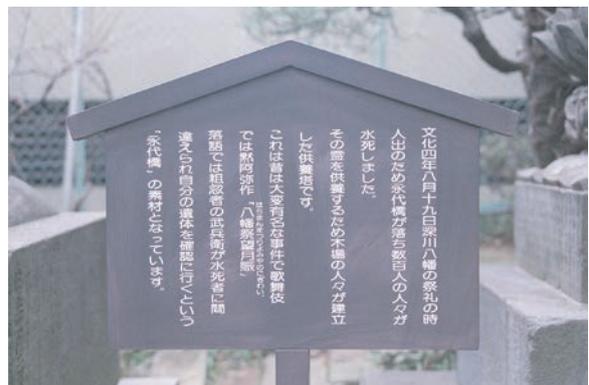
文化4年（1807）年の砂糖問屋・薬問屋と十組問屋との紛争の調停を首尾よく取めた茂十郎は、三井や町年寄の樽与左衛門の後ろ盾を頼んで十組問屋の取締り世話役となった。幕府も茂十郎を十組頭取と呼ぶことを許し、苗字帯刀を許可し町年寄の次に列する待遇を与えた。

茂十郎は、十組問屋の衰退を菱垣廻船の衰退に起因するとして新船70艘の建造を計画して三井からの支援もあり菱垣廻船の再興を図るのである。廻船の隆盛を喜んだ船頭や水主たちが航海ごとに得る金から出金を申し出、茂十郎はその利用法として三橋会所という金融機関の設立を計画する。三橋というのは当時の隅田川にかかる四橋（両国、新大橋、永代、大川（吾妻））のうちの両国



文化4年8月8日 八幡宮祭礼永代橋崩落の図

東京都江戸東京博物館 蔵 下図は目黒区の花福寺にある供養塔（東京都指定有形文化財）



橋を除く三橋のことである。両国橋は町奉行直轄だが、この三橋は町年寄の管轄で、修理は町方持ちであった。文化4年8月には、深川八幡の祭礼にどっとでた群衆の重みで永代橋の落橋事件が起こる（溺死者440名ともいわれる）。

こうしたことを背景に三橋会所の設立を幕府に申請し受理される。

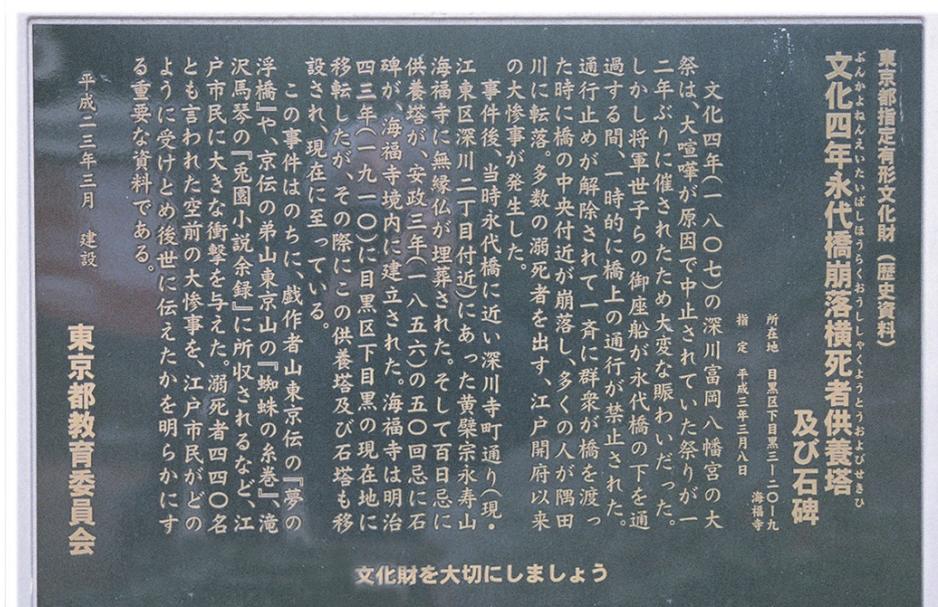
また、茂十郎は、江戸の十組問屋を強くするために、問屋の株を、幕府から鑑札を下げ渡してもらおうという形で公認してもらい、その代わりに、江戸において安心して商売を営むお礼という意味で、一種の税金のような「冥加金」というものを幕府に毎年一定の金額を継続して献上するというを願い出たのである。幕府はこれを受け入れ、冥加金を出すものだけに問屋株の鑑札が下付されることになる。

こうして、公認株鑑札は独占的支配権を問屋仲間に与え、株そのものが財産となるに至る。

以来、冥加金を出す問屋の数が増え、毎年一万二百両の冥加金が幕府の財政を潤すことになる。茂十郎はこれを足掛かりとして、文化10年には幕府の米価調節を助けるとして米穀取引所を出願し許可となっている。こうして十組問屋、三橋会所の頭取ばかりでなく米会所の頭取にもなり、杉本茂十郎は、江戸の経済界の実権を握る大実力者となるのである。

（『大江戸二百六十年』を参考に要約）

しかし、本誌にもある米の買い占めの失敗や冥加金の流用などが問題となりついにその座を追われるのである。



海福寺にある東京都教育委員会の永代橋崩落についての解説